
スプレンティッド

パンドラ・L・ロジャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スプレンティッド

【著者名】

ΖΖΓード

ΖΖΓード

【作者名】

パンドラ・L・ロジャー

【あらすじ】

その世界では、エアブリッツは誰もが魅了されるスポーツであった。それは飛ばされた800年後も変わりはしない。エアブリッツの試合中、神話の一端としか思われていなかつた『ディセント』が現れ、ヴァンはそのものに触れてしまう。目覚めると、そこは海。そこは、自分が生きた時代より、800年後の世界であった。

プロローグ ～ヴァン編～

その夜のエアブリッツの試合は、ヴァンにとって特別な意味を持つていた。

自身が所属する東代表の『スプレンティッド・グレイス』と南代表の『マッドレイグ』の、トーナメント決勝戦。街中がこの一戦に注目し、スタジアムの観客は超満員に膨れ上がっている。あつと言う間に売れたチケットは高値を呼び、ヴァンに何とか入場する手立てはないかと泣きついてくる女の子まで出る始末だった。

昨年シーズンに華々しくデビューを飾ったヴァンは、その実力が認められて今年、名門スプレンティッド・グレイスのエースとして試合に臨んでいる。たかだか16歳の、しかもアマチュアを卒業したばかりのルーキーの選手に対する扱いは破格であり、それだけヴァンの技量が高く評価されていて、また期待に応える結果を残したことを見ていた。

だが、ヴァンは知っている。

スプレンティッド・グレイスのファン　いや、スプレンティッド中のエアブリッツを愛する人々は、ヴァンをそのまま見ていよい。いつもその華麗なボールさばきや切れ味の鋭いショートの影に、別の男の影を映し出しているのだ。

今では伝説として語り継がれる、スプレンティッドの輝ける星。その男が隠し持つという、必殺のショートを見るためだけに、観客が試合場に殺到した、エアブリッツ界のカリスマ。その男は傲慢にして不遜ながら、常に期待以上の実力をゲームを見せ付けて来た、

大選手 。

英雄の名は、ゼイオン。10年前に海で消息を絶つたヴァンの父親だった。

少なくともそのプレーを直に見ることができた世間の観客、つまりヴァンより若い年代のファンを除けば、ほとんどの連中は昨年、彗星のよう^{すいせい}に登場した新人に、かつての名選手の面影を見ていた。一拳一動^{いつきょくいとう}に、ゼイオンとの類似^{るいじ}を探し、その日よりも10年以上も昔のゲームの話に花を咲かせた。彼らにとって、ヴァンは驚異^{きょうい}のルーキーなどではなく、2代目ゼイオン、エアブリッツの英雄の血を受け継いだ“夢”の再来なのだ。

ヴァンはそれが嫌^{いや}だった。

自分はヴァンという個人であり、誰かの息子などという選手ではない。こと、エアブリッツに関しては、親の七光り^{ななびか}で特別扱いされていると見られてはたまらぬと、それこそ血のにじむほど練習してきた。

それに、ヴァンはゼイオンが好きではなかつた。まだ幼かつた自分にも優しい言葉をかけはせず、相手チームや観客を挑発^{ちょうはつ}する時と同じ、自信過^{じしんが}剰^{じょう}な見下した態度で接してきた父親^{父方}馬鹿^{ばか}にされるのが子供心^{じどかじん}にも悔しくて、いつも泣いていたように思う。そのうえ、母はその夫にそつこんで、ヴァンをにろくに振り向いてはくれなかつた。

だから、父親が行方不明^{ゆくえふめい}になり、捜索^{さうそく}が打ち切られた時も、悲しいとは思わなかつた。帰つてこなくて良いと本氣で考え、そして結局ゼイオンは戻らずに“伝説”となつた。色褪^{いろあ}せぬ幻影^{げんえい}となつて人々の記憶に焼きつき、今もヴァンを苦しめていた。

『今夜こそ、この影を振り払ってやる』

ヴァンはそう、心に誓つていた。父の偉業を称えて開催された第一次イオン記念トーナメント。その決勝という舞台で、荒くれ者ぞろいのマッドレイクを下ろし、自分は2代目ゼイオンなどではなくエース・ヴァンなのだ、そうスプレンディッドのすべての人々に見せつけてやるのだと。

壁として高くそびえる、大嫌いな男の幻影を越える決意を陽気な笑顔に隠して、ヴァンは運命の一戦に挑む。ゼイオンという観客にとっての自分自身にとつての“夢”を終わらせるために。

しかしこの夜、ヴァンを取り巻く世界は、一瞬にして激変する。

チームの名サポート、リュックからキラーパスを受け取り、シュートを相手ゴールに叩き込もうとしたあの瞬間、ヴァンはスプレンディッドに、破壊の嵐が吹き荒れるのを目撃した。

天か、地獄からやつてきた、怒れる巨大な破壊の神『ディセント』。しかしこの神の存在は、神話の一端にしか過ぎないものだと、彼らは想つている。

撃ち出される衝撃波にビル都は崩壊し、ハイウェイは波立つ瓦礫へと変わる。『ディセント』から分離した無数の魔物とも、悪魔ともいえる生き物が撒き散られ、眠らぬ都を混乱の輪廻に陥れた。

そのパニックの中で、ヴァンは父の友人として幼少期より自分を見守ってきた男、ヴィクセンに導かれ、災害の中心『ディセント』そのものに触れることになる。ヴィクセンもろとも、まばゆい光に吸い込まれて、そして……。

そしてヴァンは、見知らぬ海に目覚める。

そこは、800年以上も前にスプレンディッドが滅びた世界。
宗風も常識も、ヴァンの知るものとは違う。しかしどこかに共通
の匂いを残した“スフィア”と呼ばれる世界。『ディセント』の脅威
に怯えながら、魔法文明に生きる人たちが暮らす世界。

ならば自分は、800年後の未来に放り出されてしまったのかと、
ヴァンは不安と孤独に取り残されていた。故郷スプレンディッドは
『ディセント』に滅ぼされ、今は廃墟と化しているという。
属するすべてを チームを、街を、彼を知るすべての人々を、
さらには生きるべき時代も奪い去れ、ヴァンは途方に暮れる。

そんな望みのない中で、彼は一人の娘と出会った。

魔法士になつたばかりの、ヴァンと同い年の少女『レイナ』。彼
女はその小さな肩に、スフィアの命運を、偉大な魔法士の娘である
という期待を背負い、あの『ディセント』と戦うための長い旅に赴
こうとしていた。

ヴァンはレイナに、スプレンディッドでも自分の境遇と似たもの
を感じた。親の名声から多大な重圧を受け、有名人の血をひくもの
として見られてしまう立場 だが、レイナはヴァンとは違つてい
た。人々に敬愛される父を誇りに思い、その思いを勇気へと変えて
困難に立ち向かおうとしているのだった。

故郷の名の残された地を目指し、彼女のたびに同行するつち、ヴァンは気付き始める。

自分とは関わりのない世界だと思われていたこのスフィアでも、

自分は父親を越えなければいけないことを。反発するだけではなく、一人前の男としてその生きざまを乗り越え、ゼイオンの残した意志を成し遂げねばならないということを。

愛すべき少女を救うため、真の勇気を持つて少年は立つ。

そして、終わらない“夢”
”^{ヒロアード}に終止符を 。

プロローグ レイナ編

志せば、誰もが魔法士になれるといふわけではない。

自然界に存在する物質の原点となる力を解放し、自らからの力にする技能。そして、その幻影魔と祈りを交わし、自らの使役にする能力。

どちらも常人には、存在すら自覚できぬ精神の高次領域を駆使するものであり、とりわけ後者は、強い精神力に恵まれ、またその負担に耐えられる心身の持ち主でなければ使いこなせない、高技能な力である。

つまりは、持つて生まれた素質こそが、魔法士への道を拓く第一の条件であった。生まれ落ちた時点で、まずほとんどの者がこの資質で弾かれることになる。

加え、可能性ありと見なされても、2、3年は続く従魔法士としての修行で大半が脱落してしまう。才能の芽はあっても、それを伸ばし、幻影魔との対話が出来るまでの苗木へと育て上げる前段階で、強靭な意志を持たぬ者は間違いなく挫折してしまうのだ。

あきらめぬ意志 それは、魔法士のスフィアにおける役割と直結している。

すなわち、生命ある大災害『ティセント』を討ち滅ぼす最前線に立つ、ただ一つの対抗手段であるということ。

鋼で武装した数千の兵も、岩をも碎く大砲も、寺院に禁じられている強大な兵器を用いても退けることのできない『ティセント』を、『終焉の魔法』をもつて調伏する、スフィアの希望の象徴。

海を割り、大地を揺るがし、大空を覆う、魔物とさえも見えぬほ

どに巨大な破壊の象徴『ディセント』と、たつたひとりで向かい合
い戦い抜こうとする覚悟こそが、志ある者を魔法士たらしめる力の
源であった。この意志なくして魔法士の旅を乗り越えることはでき
ず、『ディセント』を倒すために命を捧げた祈り子たちの助力を得
ることはできない。ましてや、800年の間に6人しか成し得てい
ない“終焉の魔法”を身につけるなど到底、不可能なのだ。

逆に強い覚悟を胸に抱いていれば、精神的な資質が遅れて花開く
ことさえある。大魔法士に数えられる5人はいずれもそうした遅咲
きの才が大成した事例であり、最も若くして『ディセント』を消し
去ることのできたエイガーでも、修業を始めたのは30（みそじ）
をいくつかして越えてからの事だった。

高い素質と、何よりくじけない戦いの意志。それを兼ね備えてい
なければ魔法士にはなれない。志す過程で、誰が判別するでもなく、
自らそうなれるかどうかが決まる類まれなる術者だからこそス
フィアの民は魔法士を敬い、『平和』の到来を夢見て尊ぶのだ。

大魔法士エイガーの娘、レイナは、ゆえに尋常ではない期待を一
身にあびてこの2年間、ガサノン寺院で従魔法士としての修行を行
つてきていた。

まだ正式な魔法士ではない者に対する過剰な期待は、修業の途中
にある者を潰しかねないとして、本来なら避けられるべき行為であ
る。だが、レイナに関してはそれも無理からぬところがあつた。長
く訪れなかつた平和を10年前に達成したエイガーの血を受け継ぐ
となれば、資質の点では申しぶんがない。

それに、ガサノン島にすむ者は皆、レイナがどんな知つていた。
10年の成長を隣人として見守つてきた彼らには、レイナがその血
筋からくる素質以上に、魔法士になるにいや、大魔法士となる

のに相應^{ふさわ}しい魂の持主であることがわかつていたのだ。

プロローグ ～レイナ編～（後書き）

一時終了です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7632z/>

スプレンディッド

2011年12月25日17時48分発行